

現代における教学と伝道

長谷川 正 徳

(現代宗教研究所所長)

既成教団の教学が、一般の宗教的要求に深く耳を傾け、それに対応するという姿勢が不十分であることは、誰も否めない事実であろう。このことは、われわれの教団も埒外ではない。

現代における宗教的信仰の実際ということよりも、自宗の伝承された宗学や教学の研究をより精密にしてゆこうという傾向が強い。

もとより、宗学や教学が自らの立場を純化し、深めることは重要に違いないが、半面、その立場を封鎖的にし、その教学にみちびかれる教団をも封鎖的、保守的性格のものにしているのではないであらうか。

教学のみが純粹になり、深化され、理論的精緻さや整合が加わるにつれ、教団が現実から遊離し、停滞してしまつたというのでは、全く困るのである。

加えて、われわれの布教、伝道や、その包括主体である教団の現実への作用力の欠如は、また困つたことに、常に現実への無批判的追随という現象をもたらすのである。

第二次世界大戦前のあの軍国主義思想に対して、教団の姿勢は、どんなものであつたか。教団によって指示された教化の内容は、多く現実肯定論であり、超国家主義の謳歌であつた。

戦争肯定の論議が、民主主義の時世とともに、何の苦もなく仏法民主主義に変貌してしまう。こういう在り方からは、自己の根本的立場からの歴史との対決、時代を作る立体というものが全く出てこない。

このような教団の単なる現実追従や適応は、教団にとつての核心たるべき教学の負う重要な責めではなからうか。教学はあくまで教団の精神ともいふべきものであつて、その教学の純化はそのまま教団の精神的純化であり、その現実遊離はそのまま教団の現実遊離につながる。ところが教団というものは、他方において、いわば身体的に現実の世界に組みこまれていのである。その限り、教団は、精神的に現実から遊離していればいるほど、それだけ容易に現実への無批判的追従に陥入りやすくなるのである。わが教団を現実への単なる追隨者たらしめては絶対いけない。

ここで基本的に考えられることは、教学は現実に根ざした宗教的要求の自由の根源から自らの信仰教義を再把握するという方向に構築されるべきだ、ということであろう。

通常には、教学が信仰を規定するという方向がとられるが、今日においては、信仰が教学を形成してゆくという転換がなされるべきであろう。教学が信仰を規定するというのは、安定期の軌道である。現代のごとき一種の基礎的危機ともいふべき時期にあつては、信仰の新しい可能性が新しい教学を形成してゆくことにならなければならぬ。

もともと、教学から信仰が出たのではなく、信仰から教学が生まれ、整合されたというのが本来である。その本来に、今日は還帰せねばならぬと考えるのである。

いま、現代宗教研究誌で課題として研究している“生命と倫理”の問題一つとってみても、或は、仏教教団全体に大きな問いかけをなしつつある“同問題”にしても、これらは本質的に教学の根基にかかわる問題であり、したがって教化・伝道の根本に触れてくる主要な問題であろう。

お題目総弘通運動は、このような根源的課題を踏まえての全教団のエネルギーを結集した大運動でなければならぬ。